

(1) 色彩語 (小学六年)

色彩語とは、文字どおり文章中で用いられている色彩を感じさせる語句のことです。

色彩語は、視覚に訴える語句ですから描写的な表現の働きをもっています。そして、その視覚的な美しさに一定の表現上の効果が期待されていると見なせます。

したがって、このような色彩語が出てきた場合には、その色彩を単に視覚的な美しさとしてとらえるだけでなく、その色彩の背後に潜んでいる意味をとらえることです。

色彩語には、しばしば作品全体を彩る役目を帯びていたり、その場面や登場する人物を印象づけたり、語り手の気持ちと深くかかわったりしている場合があるからです。

たとえば、「やまなし」では、次のように色彩語が用いられています。

上の方や横の方は、青く暗くはがねのように見えます。そのなめらかな天じょうを、つぶつぶ暗いあわが流れていきます。

この例では、「青く」はもちろん色彩語ですが、その他に「暗く」も「暗いあわ」という使い方からみて色彩を感じさせる語句ですから色彩語と見なせます。「はがね」も同様です。

ただ、現実には「暗い」という色彩は存在しません。「暗く」というのは、「あわ」がそのように見えるという語り手の主観を表すことばです。

「青く暗くはがねのように」という言葉からは、何やら不気味な印象が感じられます。この部分の前後の「クラムボン」の「かぶかぶ」という不思議な笑い方と、まもなく起こる〈クラムボンの死〉とこれらの色彩語とを照らし合わせると、これらの色彩語は、ここに描き出されている異様な状況を暗示していると見なすことができるでしょう。

魚が、今度はそこらじゅうの黄金の光をまるつきりくちやくちやにして、おまけに自分は鉄色に変に底光りして、また上の方へ上りました。

「黄金」「鉄色」「底光り」を色彩語と考えてよいでしょう。魚が「鉄色に変に底光り」すると、この光景も異様な感じを与えます。殺人者さつしんじやに変じた魚の姿が浮かび上がってくる部分です。

「やまなし」という作品におけるこのような色彩語は、物語の中の状況や登場人物（この場合は魚）と密接なかわりをもっています。

このような色彩語の与える印象から、この物語の世界を感覚的にとらえていくことも可能となるでしょう。

【課題】

「やまなし」を読んで、〈色彩語〉を手がかりに物語の「五月」の場面と「十二月」の場面が与える印象の違いについて話し合ってみましょう。

(2) 象徴語 (中学一年)

象徴語とは、日常のことばでは表しにくい抽象的な意味や内容を具体的なしは感覚的に連想させる働きをもった語句のことです。

たとえば、ハトで「平和」を表し、白で「純潔」を表すといった場合です。

なお、〈象徴語〉と〈比喩〉とは、やや似通った性質をもっていますが、次のような点で根本的に異なります。

比喩の場合は、「たとえるもの」と「たとえられるもの」との間に、感覚的に感じとりやすい関係があります。これに対して、象徴語の場合は、その語句が本来的にもっている感覚的な意味や内容によって、簡単には表しにくいような抽象的な意味や内容を表しています。

具体的な例で見えていきましょう。

杉みき子に、「にじの見える橋」(中一)という作品があります。

何もかもうまくいかないでふさぎ込んでいる少年が、歩道橋の上から思いもかけずに見た虹をきっかけにして、その心のわだかまりがとけ、明るさが戻ってくるという話です。

この作品には、「少年」の心持ちの微妙な変化が描かれているのですが、そのことを説明することばはごくわずかです。代わりに描かれているのは、「にじ」を中心とした「雪」や「雨」などの自然現象です。つまり、これらの自然の現象が「少年」の心の状態を暗示する〈象徴語〉となっているのです。

「灰いろの空」も、はればれとしない「少年」の心を象徴していることばです。その「灰いろの空」を「ほんの一部分」ですが、「あざやかにまたいでいる」ところの「にじ」も、少年の心のわだかまりがとけ始めていることを暗示する〈象徴語〉となっています。

さらに、歩道橋にかけのぼって、「ひと目で見わたすことができた」はなやかな「大空のドラマ」としての「にじ」は、「少年」と仲たがいをした「友だち」との心を結ぶ〈かけ橋〉としての象徴となっています。

このように、「にじの見える橋」という作品は、自然の現象を表すことばを〈象徴語〉として使用することによって、「少年」の内面のドラマを巧みに描き出しています。

「やまなし」(小六)という作品の場合は、題名そのものが〈象徴語〉となっている事例です。

題名が象徴語となっている事例は決して少なくありません。

「やまなし」では、十二月の谷川に落ちてきた「やまなし」の実は、五月の谷川で魚をとって食べた「かわせみ」と対比されて描かれています。

「かわせみ」がかにの子どもらに不安を与えたのに対して、「やまなし」は、かにたちの住む谷川の世界に平安をもたらした存在として描かれています。

つまり、「かわせみ」と「やまなし」とは、「五月」と「十二月」という二つの季節を通して描き出している世界を象徴しているのです。

二つの世界に共通しているのは、生物の〈死〉という現象です。

ただし、十二月の世界での「やまなし」の死は、五月の世界のクラムボンや魚などの突然訪れた死ではなく、一生を生ききったかたちでの死なのです。つまり、かにの子どもたちに恐怖を与えた死ではなく、安らぎを与えた死として描かれています。

【課題】 「にじの見える橋」(杉みき子作)を読んで、〈象徴語〉を手がかりに「少年」の

心のドラマについて話し合ってみましょう。

(3) 接続語 (小学二年・三年)

接続語とは、文法的にいえば、文字どおり文章の中で理由や条件を表したり、前後の文をつないでその関係を示す働きをもった語句のことです。

接続語をみていく時に、注意していききたいことは、それを書き手や語り手がどのような意図や気持ちで使用しているかという点です。

つまり、接続語を通して書き手や語り手の書き表す姿勢や語る姿勢を探っていくことなのです。

具体的な例で見えていきましょう。

ゆでたまごは、白身も黄身もかたまつて、からにびったりついています。(ア)それで、たまご全体が一つになって、こまが回るように回ることができるのです。

(イ)ところが、生たまごの中身は、とろとろしています。(ウ)ですから、からに力をくわえて回しても、ゆでたまごの中身のように、からといっしょに回ることはありません。自分の重さで止まろうとします。(ニ)どちらが生たまごでしょう」小三)

この例文では、ゆでたまごと生たまごの回れ方の違いを対比的に説明しています。その対比的な内容の違いを述べるのに、「(イ)ところが」といういわゆる「逆接」の接続語が用いられています。

また、(ア)・(ウ)は、いわゆる「順接」の接続語が用いられています。前文の内容が後からくる文の内容を成立させる条件という関係を表しています。

このように、接続語は、説明的な文章にあつては、書き手の論理の展開を読み手に分かりやすく示すための目印となっています。

このような接続語に目を向けていくことによって、書き手の思考や論理の展開の仕方を読み取っていくことができます。

文学的な文章の場合についても見ておきましょう。

「かさこ地ぞう」(小二)は昔話(民話)ですから、できごとが語り手によって語り進められていくかたちで書き表されています。できごとが時間を追って語り進められています。

このような文章では、できごとの進行を表すことばのかたちとして、いわゆる「順接」や「並立・累加」の接続語が効果的な役割を果たしています。

- ・そこで、じいさまと ばあさまは 土間に 下り、ざんざら すげを そろえました。
- ・そこで、やつと、あんしんして、うちに 帰りました。
- ・すると、ばあさまは、いやな 顔 ひとつ しないで、……………
- ・すると、ばあさまも ホホと わらって、……………
- ・それから、ふたりは つけな かみかみ、おゆを のんで やすみました。
- ・すると、ま夜中ごろ、雪の 中を、……………
- ・そして、じいさまの うちの 前で 止まると、……………

このように、話のところどころに、接続語が使用されています。これらの接続語は、いわば、語り手が話の節目節目で話にはずみをつけ、読み手（聴き手）の期待に沿い、興味をさらに促すような効果を果たしていると言えます。

なお、「かさこ地ぞう」の話の中には、これらの「順接」「並立・累加」の接続語に対して、二箇所において「ところが」という「逆接」の接続語が使用されています。

- ・ところが、地ぞうさまの 数は 六人 かさこは 五つ。どうしても 足りません。
- ・ところが、そりを 引く かけ声は、長じやどんの やしきの 方には 行かず、こつちに ちかずに きました。

この最初の「ところが」という「逆接」の接続語は、「じいさま」の「地ぞうさま」に対するやさしい思いと読み手の期待に反する内容を接続していますが、逆に表現上は、この語句によって読み手の期待がいつそう高められていくという効果をもたらしています。

また、この後に「じいさま」のやさしさが並のものでないことも明らかになってくるのです。二つ目の「ところが」も、「じいさま」の思いに反する内容に接続していることで、読み手の期待はいやが上にも高められるという効果をもたらしています。

「かさこ地ぞう」の中で、この「ところが」という「逆接」の接続語が使用されている箇所と、先の「順接」や「並立・累加」の接続語が使用されている箇所とを比べてみましょう。「順接」の接続語も「逆接」の接続語も共に読み手の期待を高めるといふ語り手の語る姿勢のあらわれであることに変わりはありません。

しかし、「逆接」の場合には、その語り手の姿勢による期待効果が、「順接」とは比べものにならないことは明らかです。

さらに、この「ところが」という接続語が使用されている箇所は、この昔話の中の、いわば（山場）（クライマックス）にあたるところであることがわかります。

文学的な文章におけるこのような接続語が出てきた場合には、低学年では語り手の語り口調をこれらの接続語の読み方で表してみるとよいでしょう。

また、高学年では、「順接」と「逆接」の場合での語り口調の違いについて話し合ってみるとよいと思います。

【課題1】 説明文を読んで、そこに用いられている（接続語）から書き手が自分の説明したいことをどのように書き表そうとしているかについて話し合ってみましょう。

【課題2】 文学的な文章を読んで、そこに用いられている「順接」や「逆接」の（接続語）を手がかりにして語り手の語り口調の違いに話し合ってみましょう。

(4) 指示語 （小学二年・四年）

指示語とは、「こそあど言葉」とも呼ばれます。指示語は、それまで述べてきたことのある部分をもとめて再び提示し、それを後から続いてくる文につながる働きをしています。

つまり、指示語は、文字通り先行する内容を指し示す働きをもつと同時に、それによって後先をつなぎ関係づける働きをも果たしているのです。

具体的な事例でみていきましょう。

やがて、花は、すっかり かれて、(ア)そのあとに、白い わた毛が できて きます。
(イ)この、わた毛の 一つ一つは、ひろがると、ちようど、らっかさんのように なります。
たんぼぼは、(ウ)この わた毛に ついて いる たねを、ふわふわと とばすのです。
(エ)この ころに なんと、(オ)それまで たおれて いた 花の じくが、また おき上がります。そうして、せのびを するように、ぐんぐん のびて いきます。
なぜ、(カ)こんな ことを するのでしよう。(キ)それは、せいを たかく する ほうが、わた毛に 風が よく 当たって、たねを とおくまで とばす ことが できるからです。
(「たんぼぼの ちえ」小二)

——線を付した語句は、すべて指示語です。いずれも文脈に即した指示の働きをしています。

「たんぼぼの ちえ」は、二年生の教材ですが、これだけの部分に七つもの指示語が出てきますと、これらが指示している内容をよほどしっかりとらえていかないと、文脈に即した内容の読み取りが難しくなります。

これらの指示語を品詞で見えますと、(オ)と(キ)は代名詞、他はすべて連体詞となります。

それぞれの指示語が指している内容から見えますと、ほとんどはその指示語の直前の一節あるいは一文の内容を受けています。

その中で、ちよつと注意したいのは、「(ウ)この」「(オ)それ」という指示語です。

(ウ)は、(イ)と(エ)と同じ「この」ですが、指し示している内容は異なります。

(エ)は明らかに時期を指していますが、(イ)と(ウ)とは「このわた毛」となっていて、同じものを指しているように見えますが、正しくは少し異なります。

(ウ)は「らっかさんのようになった」という内容を指し、(イ)は「花がかれたあとにできた白い」という内容を指しています。

また、(オ)の指示語も(エ)と同様に時期を指示していますが、この場合は、取りあえずすぐ上の「このころ」という時期を受けていると考えておいてよいでしょう。

ただ、「このころ」というのも具体的にはいつのことになるのか、これだけでははつきりしません。そこで、(エ)の「この」がいつの時期を指しているのかを考えなければなりません。なお、(カ)の「こんな」という指示語も、直前の文の内容「せのびをするようにぐんぐんのびていく」を受けていることが分かります。

以上のように、短な一つの段落に一つないし二つの指示語が使用されています。

ですから、これらの指示語が指示している内容を正しくとらえようとしても、なかなか難しい作業となることでしょう。

もう一つ、文学的な文章の中で用いられている指示語の用法について見ておく必要があるでしょう。

運転席から取り出したのは、あの夏みかんです。まるで、あたたかい日の光をそのままそめつけたような、見事な色でした。すっぱい、いいにおいが、風であたりに広がりました。

(「白いぼうし」小四)

この例文の中の「あの」という指示語の場合、先に見た説明文のように、指示する内容が直前にあるわけではありません。また、その意味するところもそれほど単純ではありません。

「あの夏みかん」の「あの」には、〈すでに読者のみなさんがごぞんじの〉といった語り手の気持ちが込められているのです。

しかも、この夏みかんはただの夏みかんでなく、運転手の松井さんが「いなかのおふくろ」から「におい」まで送り届けてやろうと、「速達」で送ってもらった特別な夏みかんなのです。つまり、松井さんの「おふくろ」のそうした思いが込められた夏みかんであるということが強調されている「あの」なのです。

この事例のように、文学的文章の中で使用される指示語には、語り手の気持ちが反映されて居ることが多いのです。

ですから、文学的文章で使用されている指示語の場合には、単にその指示語が指している内容をとらえるだけでなく、その言葉に込められた語り手の気持ちをもとらえていくことも必要となる場合があります。

【課題1】 説明文を読んで、そこに用いられている〈指示語〉が指している内容を正しく読み取っていきましょう。

【課題2】 文学的な文章を呼んで、そこに用いられている〈指示語〉に込められている語り手の気持ちについて話し合ってみましょう。

(5) 漢語・和語・外来語

漢語とは、昔の中国からわたってきて日本語となったことば、あるいは、読み方だけを漢字の音で読み、ことばとしては日本で作ったもの（ㄥ字音語）を指しています。

漢語を品詞で見ると、圧倒的に多いのは名詞です。この中には、「運動する」のように、「する」をつけて、動詞としても使われるものがあります。

この他には、「新鮮（な・に）」といった形容動詞や「元来」といった副詞にもみられます。

こうした漢語に対して、もとの中国から入ってきた日本語を和語といいます。日常生活の中では、やはり、和語の占める率が高く、使用回数も多いです。

和語は、ほとんどの品詞にわたって存在しています。形容詞・接続詞・感動詞などは、ほとんどが和語です。

外来語とは、漢語のように、昔の中国から入ってきた外国語を除いて、諸外国から入ってきて、日本語として使用されるようになったことばのことです。

外来語の中には、「ガソリンスタンド」のように、要素だけは英語ですが、語句そのものとしては日本で作られた和製外来語などもあります。

まず、漢語と和語の使い分けによる表現上の効果に関する事例からみていきましょう。井上靖の「赤い実」(中一)という作品では、登場人物である〈子ども〉の呼称が漢語で表記されているところと、和語で表記されているところとがあります。具体例でみてみましょう。

- (ア) 男の子供の一人が、女の子供たちの書き初めを棒で火中から取り出した。
- (イ) 洪作は、自分の書き初めを火の中へ突っこんでいる少女を、尊敬の思いで眺めた。
- (ウ) 自分(洪作：大内注)にこのような感動を与える文章を書き初めに書いた少女への賛嘆であり、賛美であった。
- (エ) そのとき、洪作は川の流れの音に混じって、何人かの女生徒の声を聞いた。ふり返ってみると、赤い寒つばきの枝を手にした女の子供たちががけぶちの道を上がってくるのが見えた。
- (オ) 幸夫は女の子の一団のほうへさげんだ。
- (カ) 女の子供たちはすぐわなを取り巻いた。
- (キ) 女の子供たちが顔を近づけてのぞきに来た。
- (ク) 幸夫は女の子供たちの顔を見渡した。洪作もいっしょに一座の女生徒たちの顔を見回したが、だれもそれを受け取ろうとする者はなかった。
- (ケ) それはなんの前触れもなしに、いきなり一人の少女の口から出された激しい泣き声であった。
- (コ) 洪作は学校でも、女生徒というものを今までとは少し違った目で見えるようになった。

右の例文をよく観察すると、「女の子」と「女の子供たち」、そして「少女」と「女生徒」というように、和語と漢語とが場面によって使い分けられていることがわかります。

「幸夫」が主語の場合や、事態が客観的に叙述されている場合は、「女の子」「女の子供たち」というように和語が使用されています。そして、「洪作」が主語の場合は、「少女」「女生徒」というように漢語が使用されています。

なお、(エ)の事例では、「洪作」が聴覚的に把握した場合が「女生徒」で、視覚的に把握した場合は「女の子供たち」となっています。

(ケ)の事例でも「洪作」が聴覚的に把握したので、「少女」というように漢語となっています。こうした使い分けが「洪作」の意識に基づいて行われていることは明らかです。

(イ)と(ウ)では、「洪作」が自分より優れていると尊敬の思いで眺め、賛嘆し、賛美する人物としての「あき子」を指して、「少女」と表記しているのです。

(エ)と(ケ)の場合は、聴覚的に「あき子」が意識されていることが「女生徒」「少女」という漢語で表記されています。「あき子」は六年生で、「洪作」たちよりも年長でやや大人びており、そのことが「あき子」の声の響きからも聞き取れるという点が示唆されていると思われます。

この作品の末尾の一文(コ)では、「洪作」が「女の子」というものを今までとは少し違った目で見えるようになったという事実が、「女生徒」という漢語によって示唆されているのです。

以上の観点は、この作品の中で、「洪作」の目を通してとらえられた世界や、「洪作」の「あき子」に対する気持ちの変化を読み取らせる上からも重要なものとなります。

なお、この「赤い実」という作品には、他にも漢語と和語とが巧みに使い分けられている箇所があります。

- (ア) ひよどりは首を絞め木に押さえられ、小さい体を横倒しにして、無残なしかばねをさらしていた。
- (イ) 洪作も幸夫もすぐにそれを取り上げる気にはならないで、しばらく小さい生き物の死体を上から見下ろしていた。
- (ウ) あき子も息をつめたような表情で、ひよどりのむくろを見守っていた。
- (エ) 世の中にこれほどやわらかい物体はないと思われるほど、それはやわらかく無力であった。

これらはいずれも、死んだひよどりを表現したことばです。(イ)と(エ)は漢語で、(ア)と(ウ)は和語で表記されています。両者の使い分けにどのような表現上の効果が表れているでしょうか。

漢語の方の表記「死体」「物体」は、抽象化された観念的な感じで、現実感が稀薄です。

これに対して、「しかばね」「むくろ」という和語の表記は、いかにもひ弱なひよどりの死骸が転がっているという感じが表れています。リアリティが感じられるということです。

このように、漢語と和語では、表現効果の上から極めて大きな違いが生じます。したがって、その使用の仕方、特に類義語や重要と思われる語句の使い分けについては、十分に留意していく必要があります。

【課題】 「赤い夷」（井上靖作）という作品を呼んで、〈漢語・和語〉を手がかりに登場人物の気持ちの変化について話し合ってください。



（中学二年）

外来語をむやみに使用することには問題も少なくありません。しかし、すでに日本語の一部になりきってしまったっている外来語の場合は、これを適切に使用すれば、意外な表現効果を期待することができます。

具体例でみていきましょう。

「クロスプレー」（中二）という作品があります。題名自体がすでに外来語であり、珍しい作品と言えるでしょう。

「クロスプレー」ということばは、外来語としてはまだなじみ深いものとはいえません。いきなりでは意味のつかめない生徒もいることでしょう。そのために、教科書では、「判定の難しいきわどいプレー」と真っ先に注がつけられています。

この作品には、子どもたちの草野球の審判を頼まれた若い警官の、審判としての立場を逸脱して奮闘するその行動がコミカルに描き出されています。

作品中に描き出されているのは、ほとんど野球の場面ですから、当然、「ユニホーム」「バット」「ボール」「グラブ」といった具合に、外来語である野球用語がたくさん使用されています。

なお、外来語は、野球用語の他にも「セールスマン」「トラブル」「パトロール」「ポンプ」「セーター」などのことばが出てきます。

さて、この作品のおもしろさは、まさしくこの「クロスプレー」という外来語にあります。

このことばには、一応注が付いているものの、その「きわどいプレー」としての内容は、話をほぼ最後まで読んでいかなないとわからない仕組みとなっています。

「クロスプレー」という題名の意味する内容は、次のような場面に示されています。

僕はだいぶ興奮していたらしく、次のピッチャーゴロでホームを突いた。だれかが「戻れ、戻れ。」と叫んだが、僕は全力疾走して滑りこんだ。キャッチャーのミットが僕の横つ面をたたいたとき、僕の手がホームベースにタッチした。そして、キャッチャーと僕はからみ合ったまま審判の声を待ったのだが、声がない。僕は警官を見上げた。彼は顔を紅潮させて「ううっ。」と声を詰めていた。そして一瞬、間をおいてから、うなるように、

「アウト。」
と言った。

「僕」のホームベースへの走塁は、明らかにアウトでした。しかし、この走塁は、一塁から二塁へ、そしてさらに三塁へとという決死の盗塁に続くものでした。そして、審判である若い警官は、こうした試合運びにまで一々口を出していたのです。

「僕」のチームは、一点差を追っていたのです。警官としては、「僕」の走塁がセーフであつてほしいと思いつつも、その無謀さに腹を立て、しかし、一方でその決死のプレーを好ましく思っていました。警官の心の中のそうした混乱がタッチアウトの判定を困難なものにしてしまったのでした。

実は、「僕」の走塁は明らかなアウトでした。判定が難しかったわけでもないのです。それを判定の難しいきわどいプレーに仕立ててしまったのは、他ならぬ審判をしていた警官なのでした。その意味で、「クロスプレー」をしたのは、「僕」ではなくて、他ならぬ警官であったということなのです。

このようにみてきますと、「クロスプレー」という読者を煙にまくような外来語の題名は、実はこの話のおもしろさを象徴していることばであったのです。

この作品の末尾に出てくる「僕の初めの予想に近い形の、できる人」ということばは、ゲームの進行に思わず夢中になってしまったが、きわどいところで、警官という職業と同様に公正さを要求される審判としての任務を遂行し得た人、つまり、「クロスプレー」のできる人という意味が込められているのです。

ややなじみの薄い、意味の曖昧な外来語ですが、その点を逆に利用して、捨てがたい軽妙な味わいを作り出しているところを読み取らせるべきでしょう。もちろん、この作品全編に使用されているおびただしい数の外来語もこうした軽妙な味わいをも出し出しているわけで、この点も含めて気付かせていきたいものです。

【課題】 「クロスプレー」という作品を読んで、〈外来語〉を手がかりにこの話のおもしろさについて話し合ってみましょう。

(6) 慣用句 (小学六年)

慣用句とは、二つ以上の語句がいつも強く結びついて使われているうちに特別の意味を表すよ

うになったことばづかいのことです。

「鼻がたかい」「腹がたつ」「骨がおれる」といったことばづかいです。

たとえば、「鼻がたかい」という慣用語の場合、「鼻」ということばと「たかい」ということばの意味だけからは出てこない新しい意味をつくり出し出しています。ですから、子どもにはその意味がとらえにくくなります。

しかも、このような表現は使い古されているだけに、うまく使用しないと月並みな感じを与えることになります。それでも、日本人の生活に深く根をおろしていることばづかいであるだけに、適切に使用されれば、一定の表現効果をもたらすことになります。

「田中正造」(小六) という伝記文の中には、数多くの慣用語が使用されています。

- ・ 政府への質問演説に熱弁をふるっていた。
- ・ 正義と人道のために一身をささげつくして、…
- ・ 農民たちは貧苦の底にしずむようになったのだ。
- ・ せめてこれから先は、正義をつらぬいて生きたいものだ。
- ・ 正造が、国会で火のような弁舌をふるって忠告したにもかかわらず、…
- ・ 動かぬしようこを示して言葉するどく政府にせまった。
- ・ 鉱毒でよごれた水は、たちまち沿岸八十八の村々をおそい、目もあてられぬ有様となったのである。
- ・ 農民たちもようやく胸をなで下ろした。
- ・ 鉱毒地に目を注いでくれるよう人々にうったえたのだった。
- ・ その文面を見て、正造は、はらわたのよじれる思いだった。
- ・ たえにたえ、しのびにしのびでできた農民たちのかんにんぶくろのおは、ついに切れた。

「田中正造」という伝記文の中に出てくる慣用語はまだあります。実に数多くの慣用語が出現してきます。

これを単純に、書き手が表現技巧を用いているとだけ見なすことは適当ではありません。鉱毒問題という特殊な状況と、その問題に命がけで取り組んだ田中正造という人物の考え方や生き方を読者に正しく理解してもらうために、このような特別な表現が用いられているのです。

こうした慣用語が出てきた場合には、それが具体的な文脈の中でどのような目的や意図を表そうとしているのかを検討しながら読んでいくことが必要となります。

【課題】 「田中正造」という伝記文を読んで、その中に出てくる〈慣用語〉がどのような目的や意図の下で使用されているかについて話し合ってみましょう。

(7) 方言・俗語 (小学6年)

方言とは、いうまでもなく一地域で使用されていることばのことであり、俗語とは、日常生活の中で使われることばのことです。それぞれ。共通語や標準語と対比されることばです。

普通は、日常会話の中で使用される言葉ですから、一般の文章の中で用いられることはあまり多くはありません。それだけに、これらのことばが文章中に出現すると、少なからぬ表現上の効

果が得られます。

ところで、次の事例をみてください。

外国にも、花火はたくさんある。このごろ、おもちゃ屋の店先で売っているいろいろな花火は、**ほとんど**外国流の花火で、そのすみに、おとなしくつましやかに転がっている小さいせんこう花火だけが、日本独特の花火なのだ。外国流**もちろん**、中国で発明されたものをふくめて—の花火には、**例えば**電気花火などのように、火をつけるとすぐにまばゆい光を出し、**ぼうぼう**と燃え続け、その間に、初めから終わりまで、光の強い火花をたくさん出し続けるものとか、火の玉を**ぼうん**と空高く打ち上げるものとか、はなばなしい火花がいろいろある。それらの花火に比べると、せんこう花火は、**いかにも**つましく、光も弱く、みすぼらしく見える。しかし、電気花火などは、**ただまぶしい**光の火花をたくさん出すというだけで、まつ葉火花のような不思議なばく発も起こさないし、散りぎくのようなやさしさもない。

右の文章の中の——線を付したことは、先にみた副詞と同様の働きをもったものです。ここでは、注意してほしいのは、**□**で囲んだ副詞です。これらの副詞は、いずれも筆者の姿勢・態度をよりはっきりと示しているものです。このような副詞がまとまってこれだけたくさん出現している部分は、この「せんこう花火」という文章ではありません。

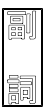
要するに、この部分には、書き手である中谷宇吉郎の花火観が示されているのです。外国流の花火と日本のせんこう花火とを比べて、せんこう花火の特色について、書き手の価値評価を含めて述べているのです。

先にみた部分には書き手のものの見方があらわれているとすれば、この部分には書き手のものの考え方が示されているのです。

【課題】

「せんこう花火」という文章を読んで、文章中に使用されている〈副詞〉を手がかりに筆者の花火に対する見方や考え方について話し合ってみましょう。

(8) 品詞—副詞・数詞・助詞—



(小学六年)

副詞とは、主に動詞や形容詞・形容動詞などの意味を詳しくする修飾語としての働きをもつことなのです。

副詞は、その働きから、①ものの性質・状態について修飾するもの、②ものの性質・状態の度を示すもの、③語り手の姿勢や態度をよりはっきりと示すもの、とに分けることができます。ただ、実際には、二つの働きを兼ね備えているものもあるので、このように厳密には分けられない場合もあります。

なお、〈表現技法〉の中の声喩（オノマトペ＝擬声語・擬態語）なども、右の①に含まれます。この声喩なども含めて、①には、描写的な働きがあります。

中谷宇吉郎の書いた文章に「せんこう花火」（小六）という説明文があります。

この説明文は、随想的な味わい深い文章となっています。その味わい深さは、書き手の科学らしい緻密な観察を支えている表現上の特質にあるとみることができます。

その中の最も顕著な特質として、数多くの副詞の使用をあげることができます。実際の例をみてみましょう。

- (ア) せんこう花火の一本を取って、まず、その先に火をつける。火は**すぐ**紙に燃え移って**ぶすぶす**といぶりだす。
- (イ) 火の玉は、初めは静かに燃え続けているが、**やがて**細かくふるえだす。そのころに、の玉をよく注意して見ると、全体がぐつぐつとにえたっていて、**何か**目に見えぬくらい小さいものが、ほとぼりしり出ているように感じられる。
- (ウ) ちんもくが**しばらく**続く。すると、**とつぜん**、火花の発射が始まる。
- (エ) まつ葉火花は、**シュツ**という音とともに、一発発射される。
- (オ) せんこう花火は、火花の反動で、**ぶるぶる**ふるえる。
- (カ) **やがて**、その火花の間合いが**少し**長くなってくる。勢いも**やや**弱ってくる。
- (キ) まつ葉火花が**だんだん**出なくなると、**ちよつと**、ひと休みしたかたちで、今度は、「りぎく」の花弁のようなやさしい短い火花が、**はらはら**と散ってくる。
- (ク) これが済むと、火花のエネルギ―を**はきつく**した火の玉は、**力なく**ぼとりと落ちる。
- このように、至るところに副詞が使用されています。

(ア)から(ク)までは、せんこう花火に火をつけてから、それが燃え落ちるまでの微妙な様子が細かな観察のもとに実に生き生きと描き出されています。

文章全体は説明文でありながら、これら一つひとつの文は、いわゆる描写の表現の機能を含んでいるといえます。この描写性をもたらしているのは、観察事実のそのままの記述と、「ぶすす」「ぐつぐつ」「シュツ」「ぶるぶる」「はらはら」「ぼとり」といった声喩（オノマトペ）とての副詞の使用によっています。

また、「すぐ」「やがて」「しばらく」「とつぜん」「ちよつと」といった副詞も、いわば動作状態を描いているわけで、描写的な機能を帯びていることがわかります。

これらの表現の中には、明らかに書き手のせんこう花火を観察する目、いわばものの見方が在するとみることができます。

ところで、次の事例をみてください。

外国にも、花火はたくさんある。このごろ、おもちゃ屋の店先で売っているいろいろな

火は、**ほとんど**外国流の花火で、そのすみに、おとなしくつつましやかに転がっている小いせんこう花火だけが、日本独特の花火なのだ。外国流**もちろん**、中国で発明されたも「をふくめて」の花火には、**例えば**電気火花などのように、火をつけると**すぐ**にまばゆい光 出し、**ぼうぼう**と燃え続け、その間に、初めから終わりまで、光の強い火花をたくさん出 続けるものとか、火の玉を**ぼうん**と空高く打ち上げるものとか、はなばなしい火花がいろ ろある。それらの花火に比べると、せんこう花火は、**いかに**もつつましく、光も弱く、み ぼらしく見える。しかし、電気火花などは、**ただ**まぶしい光の火花をたくさん出すという けで、まつ葉火

花のような不思議なばく発も起こさないし、散りぎくのようなやさしさもい。

右の文章の中の——線を付したことは、先にみた副詞と同様の働きをもったものです。ここで注意してほしいのはで困んだ副詞です。これらの副詞は、いずれも筆者の姿勢・態度をよりはつきりと示しているものです。このような副詞がまとまってこれだけたくさん出現している部分は、この「せんこう花火」という文章では他にありません。

要するに、この部分には、書き手である中谷吉郎の花火観が示されているのです。外国流花火と日本のせんこう花火とを比べて、せんこう花火の特色について、書き手の価値評価を含えて述べているのです。

先にみた部分には書き手のものの見方があらわれているとすれば、この部分には書き手のもの考え方が示されているのです。

【課題】 「せんこう花火」という文章を読んで、文章中に使用されている〈副詞〉を手

がかりに筆者の花火に対する見方や考え方について話し合ってみましょう。



(小学五年)

数詞とは、名詞の一種で、ものの数量や順序を表すことばのことです。

数詞が最もよく使用されるのは、科学的な文章です。科学的な文章では、ものごとを具体的に・実証的に表すことが大切になります。この具体性・実証性を保証するのが数詞の表現ということになります。

具体的な事例でみていきましょう。

次の事例は、「天気を予想する」(小五)という説明文の中に用いられている数詞です。

- (ア) 一九七〇年代には八十パーセントに満たなかった中率がだんだん高くなり、二〇〇〇年を過ぎると八十五パーセント以上になったことが分かります。
- (イ) 二〇一二年現在、日本では、約千三百か所にアメダスの観測装置が設けられ、その地点の降水量を常時測定しています。
- (ウ) このうち約八百四十か所では、気温・風向・風速なども観測します。
- (エ) 二〇一二年現在、気球による観測は、世界約九百か所で同時刻に行われています。
- (オ) また、赤道上空約三万六千キロメートルから、十機ほどの静止気象衛星が、地球をおおっている雲を広いは広いうつつし出しています。
- (カ) 上のグラフは、全国で、一時間に五十ミリメートル以上の雨が観測された回数を表したものです。
- (キ) 二〇〇一年からの十年間では、平均して年に二百回以上も発生していることが分かります。

この文章では、このように実に数多くの数詞が使用されています。これらの数詞の一つひとつは、明らかに一種の〈説明〉の表現として用いられていることがわかります。

(ア)では、天気予報的中率の五年ごとの推移を説明しています。(イ・ウ)では、科学技術の進歩について説明しています。(エ・オ)では、気球による観測の国際的な協力について説明しています。(カ・キ)では、一時間に五十ミリメートル以上の雨が観測された回数、水位について説明しています。

この文章では、右のような数値そのものが科学技術の進歩による天気予報的中率の向上を的確に表しています。また、科学的な技術の進歩にもかかわらず、天気予想を難しくしている突発的な天気の変化についても説明しています。

以上の事例からも、説明文などの科学的な文章には、数詞を用いた具体的・実証的な記述が不可欠であることが理解できるでしょう。

【課題】

「天気を予想する」という文章を読んで、文章中に使用されている〈数詞〉を手がかりに気象観測のための科学の進歩について話し合ってみましょう。

助詞「格助詞「が」と副助詞「は」

(中学一・二年)

助詞は付属語ですが、語尾とはちがって比較的独立した性格をもっていて、文章表現の上からは大変重要な役割を果たします。

ここでは、主語を示す格助詞「が」と副助詞「は」の使い分けが文章の中心的内容に深く関わっている場合についてみておくことにします。

永井龍男作「くるみ割り」(中二)という作品では、話のクライマックスにおいて「くるみがきれいに割れた」ことで、少年の「ぼく」が「桂さん」を「新しい母として受け入れる」という決意をする経緯が述べられています。「くるみがきれいに割れた」ことが少年の心のわだかまりを解き、新しい母を受け入れる決心を象徴するかたちで筋立てがなされているのです。

しかし、読者には「くるみが割れたこと」がなぜ「少年の決心」に結びついているのかをすんなりとは理解できないでしょう。実は、この両者を結び付ける必然的な根拠を、主語を示す「が」と「は」の役割の違いから説明できるのです。

では、この作品の中で、「くるみ」が主語としてどのように書き表されているかをみてみましょう。

本文の中では、「ぼく」が最初に「くるみ」を割ろうとして割ることができなかった第四の場面と、きれいに割ることができた第六の場面とで、主語としての「くるみ」の書き表し方が次のように異なっていることがわかります。

第四の場面……くるみが三つ四つ。卓から床へ落ちた。

第六の場面……すると、カチンと、快い音がして、くるみは二つにきれいに割れた。

第四の場面の文は、現象文と呼ばれているものです。現象文とは、書き手の主観を交えないで現象をありのままに書き表している文のことです。ですから、右の文では、「くるみがたまたま卓から落ちた」という客観的な事実をありのままに描いているだけとなります。

このような書き表し方は、この時の「ぼく」にとつてはまだ、「くるみ」が「縁のないものでしかなく、「ナットクラッカー」も「冷たい」ものでしかなかったという叙述内容から必然的に出てきていると判断されます。つまり、この時点では、「ぼく」にとつて「くるみ」がなんら興味・関心の対象とはなっていないという事実を意味しています。

ところが、六の場面の文は、判断文と呼ばれているものです。判断文とは、起こっている事態に対して何らかの主観的な判断を加えて書き表している文のことです。すでに「くるみ」が既知のものであることもあって、「くるみ」そのものにスポットをあてて、それが「きれいに」と割れたと判断を加えて書き表しています。

ここでは、さらにこの文の一文後に、「そのとき、ぼくは言った。」という文が置かれていて、「くるみは」と「ぼくは」の両者が呼応し合っています。つまり、この時すでに、「ぼく」の心は「くるみ」と一体化されているように書き表されているのです。

「ぼく」の心の殻を最終的に打ち破ったのが〈胸のすくような感触で快く割れたくるみ〉であったということになっています。

ちなみに、たまたま不意に浮かんできた「桂さんの面影」に「ちよつと慌て」て、「困つて」くるみを手にするまでの「ぼく」の心の動きは、親子三人水入らずの様子や、父の姿を客観的に見つめているという事実として書き表されています。

つまり、ここでは、次のように「が」によって現象文として書き表されているのです。

- ・ 親戚の人が帰ってしまうと、父の書齋に、親子三人が久しぶりに卓を囲んでいた。
- ・ 父が、姉に言った。
- ・ 父が、優しくぼくに言った。父の顔が、老けて見えた。

このように、「ぼく」が自分たち家族三人と父の姿とを冷静に客観的に見つめられるようになったということは、「ぼく」の心にある変化（＝少年の心の成長）が起こってきていることを暗示している読み取ることができます。

なお、この他の場面では、父の姿を「父が……」という形で客観的に描き出している文はたった一箇所（それも条件節で）を除いて全く出てきていません。ただ、第五の場面で、「姉が……」という形で姉の姿を客観的にとらえられるようになった「ぼく」の心の変化が描き出されている部分はあります。つまり、「ぼく」は、姉から父へという順に家族を客観的に見つめられるようになっていくのです。

以上みてきた事例は、「が」と「は」という助詞の使い分けが、文章全体の中心的内容と深く関わっている場合です。このような部分に注意して読んでいくことは、文章の内容面と形式面とを一体的にとらえていくこととなります。

【課題】

「くるみ割り」という作品を読んで、「が」と「は」という二つの助詞の用いられ方を手がかりに「ぼく」の心の成長していく姿について話し合ってみましょう。